





13
1833
4

繪本右圖記第四之卷

目録

論本下與上島利鎗長短

本下上島調練鎗法

本下上島試鎗長短

信長軍評説

辰吉郎共主水戰鎗法

辰吉郎智復主水

大山領發動

辰吉郎智鎗一揆

及同謀斬山淵又子

山淵又子之命

繪本古図記卷之四

論本下與上島利鎗長短

靜かなぬ世やあれは奉改りぬとに方拜朝あるがれ古例も
はとぐぬゆれど何となくお強さる世の中こそ跡はしるれ
兵を練り軍をまゐり一攻撃を事とする武家はあいてや
さう時々花雲るふ咲きぬれ矢科の月へうに振るくさやけく
とも誰う長閑きをありてをを称し彼を泳めんや今日も
誰が軍とぬ一某が國を襲ひきのふと誰がなけ行某も討
とぬるよと武又携りぬ雲のよ人ふいつき鎗の男までも飯
物の得りあるもあなりぬ世さきぞ丸きるよの飛鶴あり
けし永録二年も度く書は三年まふ月十八日小回





真蹟記 初巻四



きの
本下
上
倉の
の
倫と

真蹟記 不々有

家の下ゆりたり登城一武日の後河を述信長卿も殊
 多き難く射射酒宴と信一信長卿諸士むり
 槍の柄長き利ありや短き利ありやと尋ねし時槍
 を中へ置家へ仕官せり上洛を水とて槍の宴は短き
 を利ありと申す事信長柄の槍は短く信は水が論
 と云えり思ひ給ひ諸君その見識を申し述べて
 諸事と指し示す本下及吉進と申すやその事信長と槍の
 能く短く射し其能なり試しは槍は短く信は水が論
 長き槍と短き槍とを比べ我ら必長き方勝と云ふ
 是れ槍の能論に不及目下試しは水と云ふ水は
 下に墜り下槍は短く射して撥るを我ら我ら十人の足

将を以て三日の間槍術を教ふは長き槍は持て我勝
 きや否や及吉進と申す勝と負といふ席は論にて蓋は某も
 八十人の足将を以て三日の間長き槍の利益ありと教へ
 二日はも馬場前へ我ら長短の槍を換りて試み
 と信長卿も此儀面白くして菅谷九右衛門を以て
 将百人を上洛本下から槍術訓練と云ふは信長
 卿古熟せば我ら馬場前へ出く見物と云ふは座を
 信長卿及吉進其外諸士も悉く退出

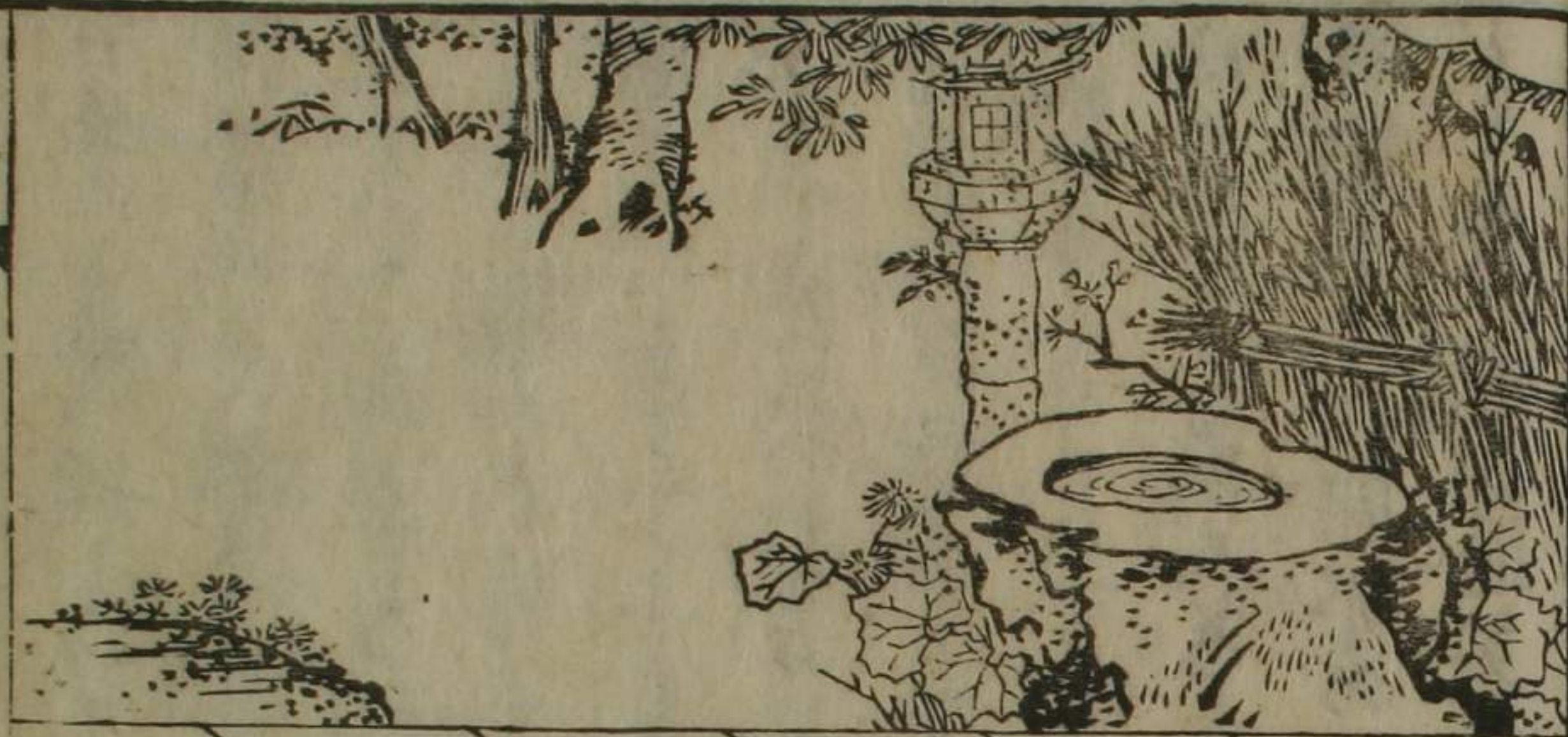
上洛本下訓練槍法

叔も菅谷九右衛門信長卿の将を以て百人の足将を以て
 本下及人へからせし槍術を訓練せむ上洛を水と云ふは



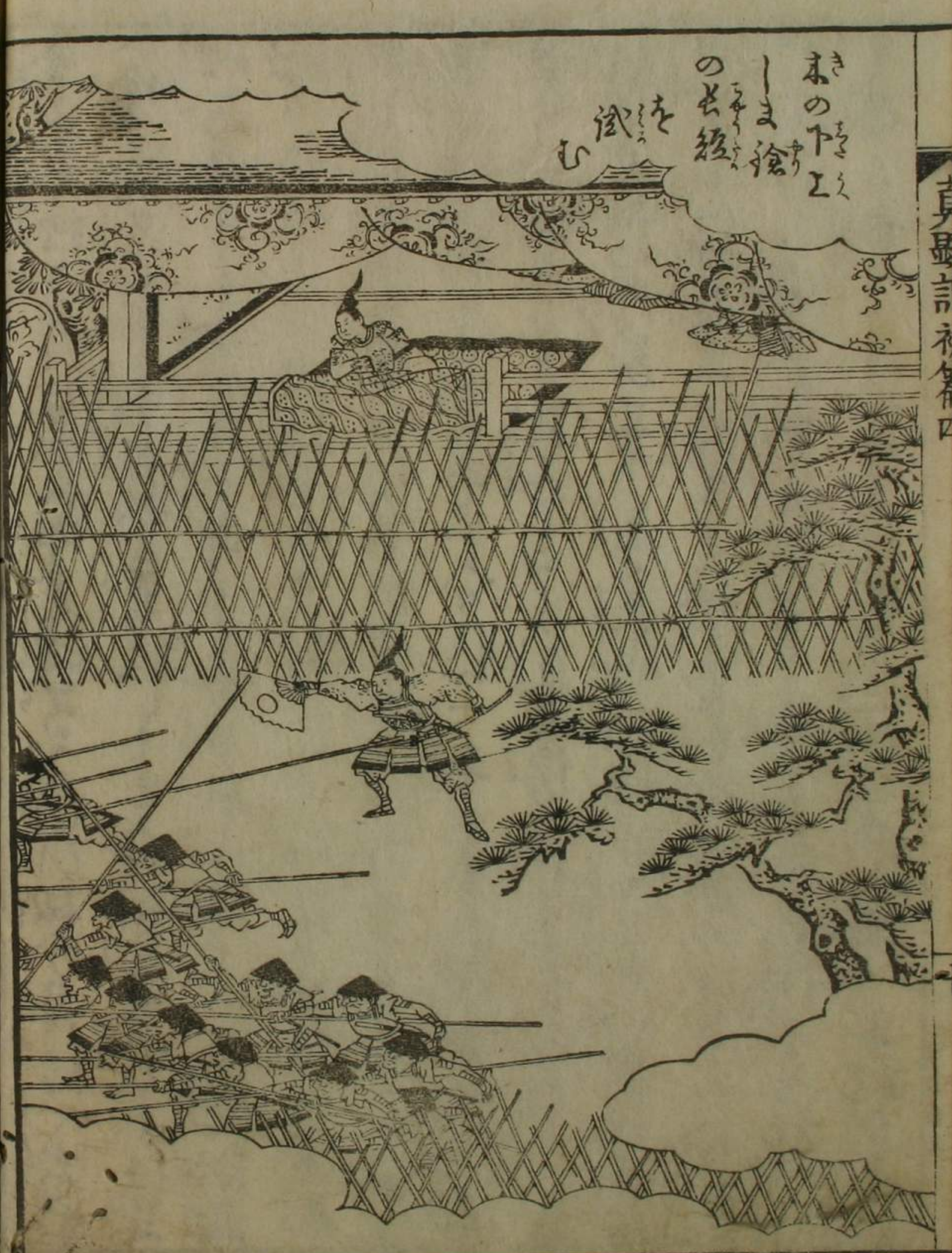
久米の
上巻
倉庫
と
洞
練
と

真言宗



士卒を集め經をひて長は勝のゆゑんを委しく傳へさせ各
 竹槍を以て朝う書ふあるを大河はあて敷かれも不智
 經才の下郎ともあれはるは秘言の功もなくまゝで泥雜
 果の誂く罵り合小児の戯のおどろきなりこれに水と
 怒り竹刀をひて士卒等と打ち殺しこれ皆くこれに水と
 うゝ其日の秘言の果にたり又も下方面に八十人の足
 経も槍の勢を以て集りしを一回は清く後者自酒肴携
 へて士卒等とまゝづゝ酒飯すも吾食はく碑と傳へ
 傳へしと家人等と命とまゝづゝ張る如く山海の珍
 味教を以て膳部の結構國を郡と郷食を以て傳へ下郎
 どもこれ傳へ追々経ををえりて人々く飲食し於て

喰ふも終るこれ後者即足経等と白い飯今日の経を
 へゆり体足す明日も来れしとて經を立て入んといふ
 経等將しと押さ下郎ども今日系上致しるに槍部調
 練のにおく久し御指下されしと一日は下れは後者即
 打笑ひ今日の秘言に及び酒食を以て調さすべしと
 休息致しとまゝとてへたれ士卒どもとまゝ方なり相
 はさくゆりたり其るどろはは清く合つてと傳へる
 あれは槍の御家本下なり末槍部練を以て度のは食
 とてもと傳へるに勝もきり方槍のけいなり後日の
 口さげは酒食の餐を以て物とえりて何ふもこれ勝
 も負も我れが力にありて本下と傳へるに掛りこれ先酒



おのつこ
しまし
の長
を
試
む

真言宗

ふくも飲るるを腹しとて多き鳴してぞゆるりたる

上洛本下武槍長經

叔山日を始めとして三日が間上洛が方うてい汗水ありも練
を磨るる方を突ぬんと息をもほくも調練は本下方ま
ち又も槍術の稽古なるく日酒食をよへ笑渡の日に日と
言ふぬ等日目の又船通て中合しとて上洛本下各又十
人の足腰は竹槍を拵り馬場の東西は陣を布く信長
御坐固久間池田森と始り今日の勝負へいふぞとかさむを
吾で御振振は出席あり於菅谷九十九のお家のを敵をお
て戦いと細む東西の兵士多敵の拘りたはれてるをいぬぬ
といや槍所合とていふ時本下通て計策と定め並き

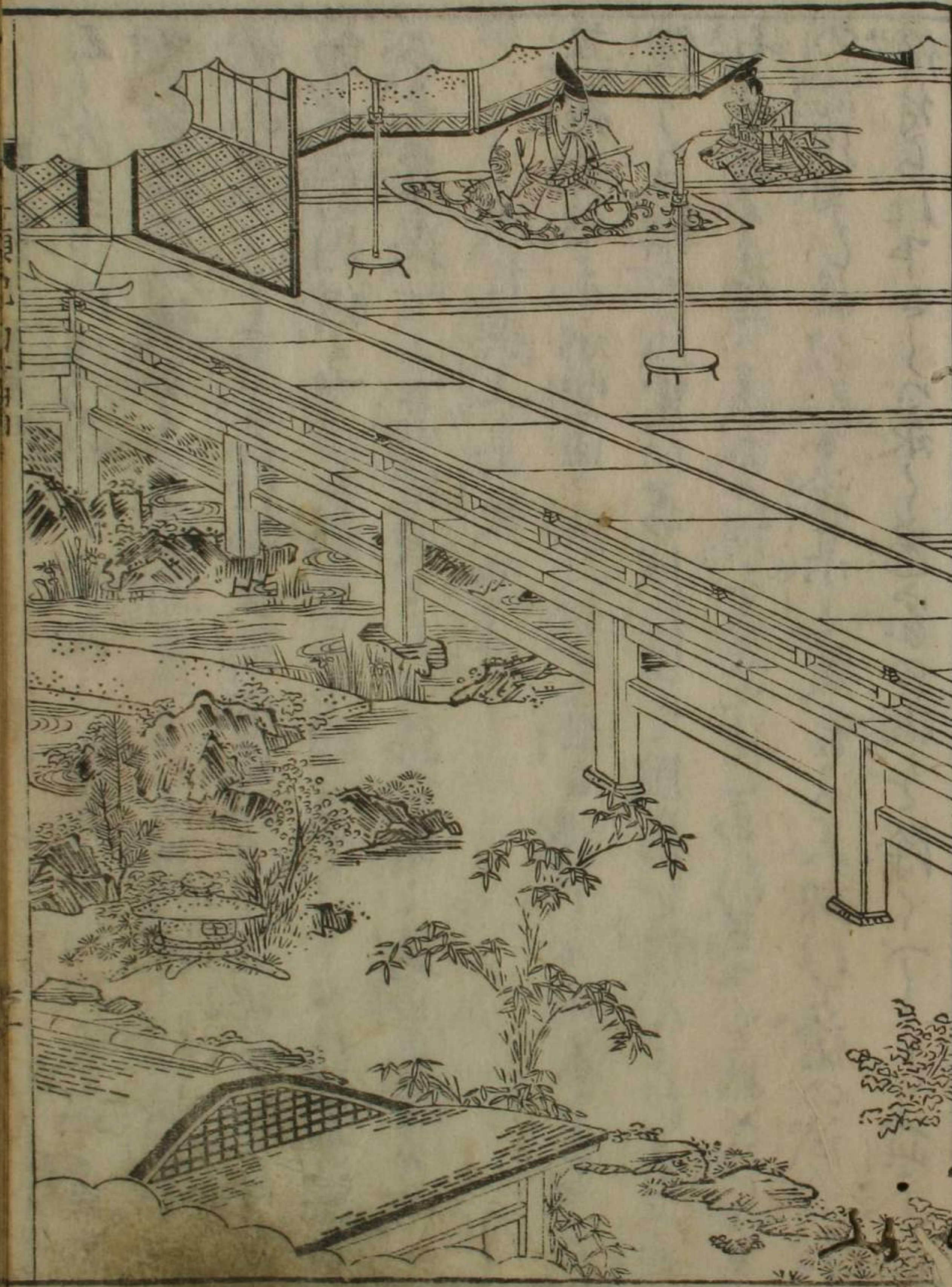
ふれい又十人の士卒忽ち三多に別と一統は音に名い
ゆふと敵波を敵し勢は急トく要二三又突かくれ
上洛士卒敵波は碁易しといふとていふとけいおの得
槍の多服もいふとていふとていふとていふとていふと
解を用き進つくとていふとていふとていふとていふと
や難ふせといふとていふとていふとていふとていふと
通とていふとていふとていふとていふとていふと
勝敵と三度揚つとていふとていふとていふとていふと
うる信長卿上洛本下あ人ををくつされ水自槍とて
む短とていふとていふとていふとていふとていふと
戦國の心け我心にも叶う兩人ともいふ後いよく水魚

たゞ忠勤を励むとて百人の足糧共一も酒とを
於て御城にたまいたり

信長軍評定

此時駿河今川義元小栗武田をかくし敵十萬の大軍と
率一上洛とすは固く信長諸臣を集めて定むる
る小佐久間信忠とて出てゆく義元大軍を以て攻め
るに味方小栗とて戦ふ鷄卵を以て大石に當るが如し
一旦今川と洛とを討てん合せて大業と起し給ふこそ長久之
計なりと言ふと林柴田の両氏は依を絶えと一日は
洛東城とてめし信長いまだ心定むる後吉郎を以て
同洛ふも後吉僅で言へる某日駿河へ同者を今川へ

虚実を伺ひしと急上洛とすふも何れも某の謀計
あり諸老臣の勅は強ひ今川へ依りて洛東へ兵糧の
後龍貞を征し其困を以て義元へ献すべき者を若く
今川に加勢と乞ふ尾州駿河の両旗をたぐひし後と攻
むる而して兵糧尾張の両勢と合せて今川を防ぎたまふ義
元とて思ふも是ら此時と未慮より上洛を水進み出
て後吉郎が中条理と似て理にやうに今川義元大團は驕て
智謀の士團は満てり依りて洛東へ加勢を乞ふ何ぞ
其依は強んや後吉大敵は下りて日根野中も
後吉即ち永井小栗が西兵糧は編み解き安後
守謀士にも竹中才去湯重治などあり名士教を



信長
軍
定

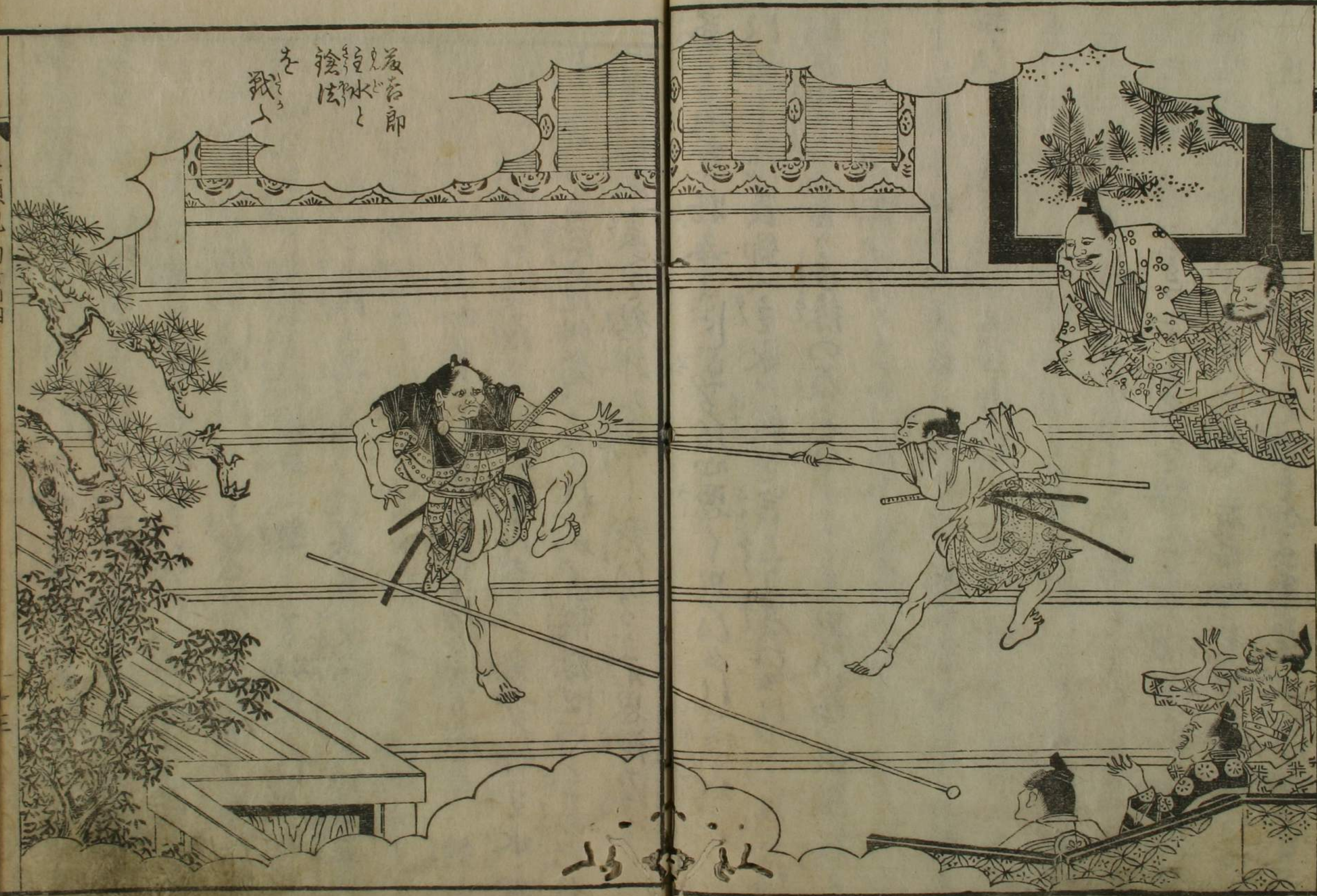
真景言初々角四

ち〜に天下の河乃ど〜容易又兵糧を攻破らんや実又
 尚おねこの秋なり君宜而臣の謀みはひ今川へ降参乃
 依就る〜と言ふに信長御心迷ひて又又改せに最古
 即づ河の内河と申さん語意ありげ又お〜々れが軍使実の
 争て改せとて其役所と立せ給へ皆く退出せり々々

後古與上島戰槍法

そのよふにまゐるといふと
 其疾と云ふは水柴田が許へ送て密に渡りて本下及者
 櫻うゝ辨古成震い君成勅めて國家と隔んとし君又血
 元々より終へるまでを是としむい其下と始り諸老臣
 の諸成用い終りて不詮某と及者又美初いて槍の試合成
 仍付られ下さうに永く出家の端を除くべしといふ此本回も

蓋、最なる物毎に、し出る心要く思ひ、しるる水が、
 に組、信長卿へ、主水が、親を言と、及ひ、れど、上、
 術の達人、最なる、練の及ぶる、一、思ひ、
 して、い、ま、言、
 ことと、得、と、此、
 押、い、く、と、碇、と、試合、仕、
 され、仮、の、試合、は、美、
 又、の、竹、槍、
 才、死、
 林、
 ら、

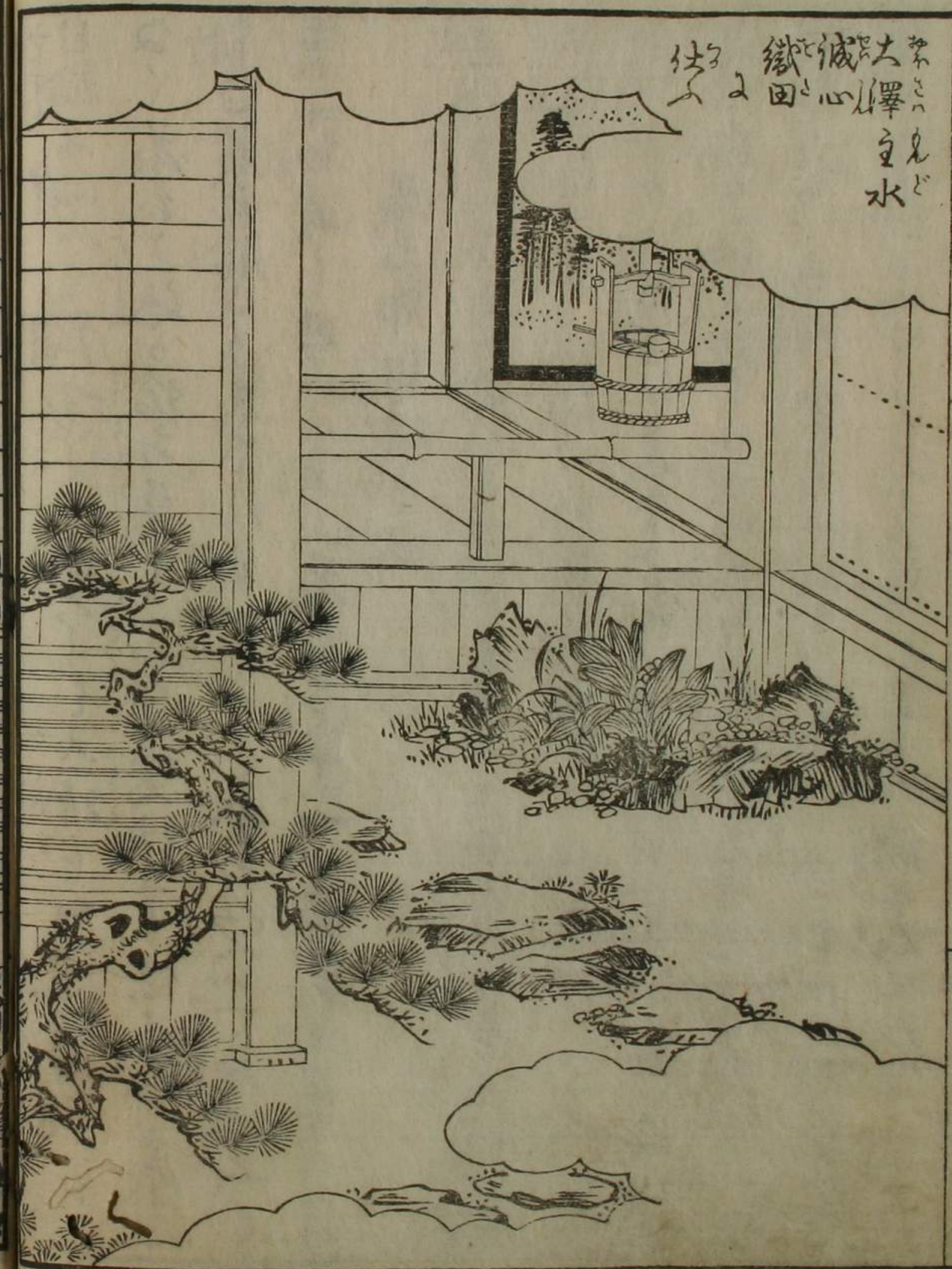


後
水
と
陰
法
を
戦
人

山崎



大徳寺
心水
鐵田
仕ふ



大度の信長卿旧悪を捨ててよく用ひ給ふべしと云ふ水毛
 をばて金刃冷汗を流し肝を敵し魂を失ひ低頭ま首
 て言曰明衆のおとく敵家の子大に水に刺某方り足
 下いふと邪洋は我素性をかり給ふ者若き汝が
 中間糸女と云ふ者其が腹心の者之清剛の源たる云高
 人をい入て汝が家にはせしめ治郎左のより汝をい
 書快きとありと教通の信を出し是皆某が計なり小阿
 らば我君の明智よく通て某は信て此計策を知らし免
 給ふなりと云ふ水毛をば蓋隠れ給ひ若き功と若し
 憐れ才智又憐れ公感披し心を傾け信長卿は仕へそ
 忠勤をよげと云り

大山領強勅

家信長卿の後身又織田十郎左の信清と云ふ人あり尾羽
 大山の城よりと不承の地教多持し其威勢甚烈し是が寵
 臣小川求馬と云ふ者あり巧言令色を以て信清の寵を得一
 家の政を悉く求馬が専らありて權勢一家中に並者は
 元素倭奸の小人なり其花菱を好み酒を又耽り驕奢目く
 増長し領地の百姓を虐課役年々に多し其の農家一統
 又困窮して其悪政を恨み清頃又希し信長卿は怒りし
 て事と知えんと云く其企をぬしに多し此求馬が卑役討方
 お配の各代三人あり何れも求馬が撰み用ひし者なり是
 利又支賜賂をむと云り民百姓の歎きを看ど一向逆を

増し給へば領地の百姓皆其因と喰ふと歎と付又此各代の中一
人重き痛と申して又此領地は野村を清とふりのを傭ひ
と各代の役を勤む此村を清い同國は野村の百姓は此村
とある者の子に信長の臣と成り井つちのつが物なり初より時
より力量衆と成り生長と農家をきくい武術と勵兵書と
讀む又此村は去の後の農家を棄てて伯父と成りつが方に月
まに居たりつが今度求馬が各代は傭ひ二人の各代諸君よ
村方接見に申すつが領地の百姓も通く苛政は苦し
申すせんと思ふ時なり又又役人の権威を恐るは扇子料
菓子料の賄賂に曾てぬど割へ休之所入りけり三
の各代に怒り底屋敷をせしむるに罵とふ百姓

いふ又又役人重きもつが結句役人を嘲罵しとて又又百
姓は此領地の百姓を見おひく初めは合と一向恐るは
なけしは役人重き怒りしとを清く愚人も捕捕て死
んと立よれば殺十人の百姓たてんで又勸誘捉る不
お殺して日頃の恨をせよとせよと又又清くは清く
を清く元来傭と人なり又又旧年の悪政を初り一途に百姓
の無れと思ひ悪き下村等一く首を並べと大に殺
もの下は二三人切倒せば其勢は恐るるなりと又又
つが近々を村の百姓も此強勸を受と清く衆道の役人
活るはつが恨を教とて擲と殺せお殺せと得抱く
を擲つて雲霞の如くを擲つ二人の各代に怒り日來乃

最良即智
後世
叔人



悪少を流るゝとゞも百姓もい曾て身にも入らざる
二人をお倒し申死生にお擲と弥を誘解る百姓を西
追東へ靡又六度斗うけり多々が次第くは百姓増り衆
多云殺を知らぬ因と化て押寄に恐るる多々次第くは弥を衆
今い歌がごと討死せんと思ひ多々此に百姓とおも
大記せんも急急と不機なるを目かけおのゝ嘆て切て入
難く一方をお破り清原をさして走り多々終る百姓二月
つとほしとて追るる危うき多々お模なり

後右即智計謀一揆

人の心は起らんとする時果して逃れざるは悲若患難なり
是天其人をして大任を命とるなり後野弥を誘ひ思ひ没

けさう強動みく多勢を切ぬけ血刃とまげ走り多々清
原の城下に下り落ちたり木下後右より召合たり後右其
き其調ふと見たり又弥を誘息をとりと走り多々物語
又又一揆の百姓も逃れとまぐと追来る後右かくくも弥
を誘危うきと化して清原の城中へ入りたり一揆衆百余人
堀際まで押寄せたりとて信長の居城を包むる
不れもあがごとくやせまぐかくやけはしと罵り合其強
動いん方は後右即足輕を命し其強を起し同させ
たり百姓も信長の悪政を恨み役人と下し揚るべきは強
附り及びたり後右即此有信長卿一言よ及び百姓若
い追て再許みえきる一先村へ引退しとて後せば信長々の

一揆を
 一揆を
 一揆を

威勢に恐るゝ大いとして刻々も大山谷の近村を御乃
 百姓三万余人集り竹をそぎく槍をぬき、谷の城に
 聚んと其後谷中へ織田信長此強敵をすまに誘き且
 怒り小川求馬をゆして又く退治とては令せざる求馬を
 己が回を恐るゝ浅井弥左衛門が麻呂の事記さば彼を
 出づれば百姓を安むと例の利口成ててとて逃ん
 と此所信長郷より役者ふ来り求馬及び二人の女代を
 石とくし求馬も今の輝一がく事記す生の女代とし
 して浅井へてその怒きたる辰吉郎又一揆の中へ役者をたて
 庄屋奉安其外魁たる者二人を石出村方勘定帳面等
 をたよせ吟味のと求馬百姓を討安ふ及ぶ不慮く求馬及び

女代もが私怒るゝ免れ三人とも死罪とす一今一人乃役
 人浅野弥左衛門傭りたる者なり衆一統の女代は若
 大山谷を退放とて百姓共も後堂を企てと記さる大山
 谷と科擧きより一揆の内より三人を刑とす此國法と記
 すべき間海軍此有る急ぎ誰なりとも三人を石連兵出
 逐退ふ及や役人を石捕求馬諸刑罰と記し但し女代
 する者も國法とすどろと云捨て座敷とて百姓もハ
 辰吉が斗ひをたにほび難くと三拜し急ぎ大山谷
 浅井弥左衛門切とて死にの女代三人を浅井へ出
 のおとくおひく事なるく録りたる浅井弥左衛門本下仁
 智より必死の難を逃とて是より辰吉郎と記す忠義乃

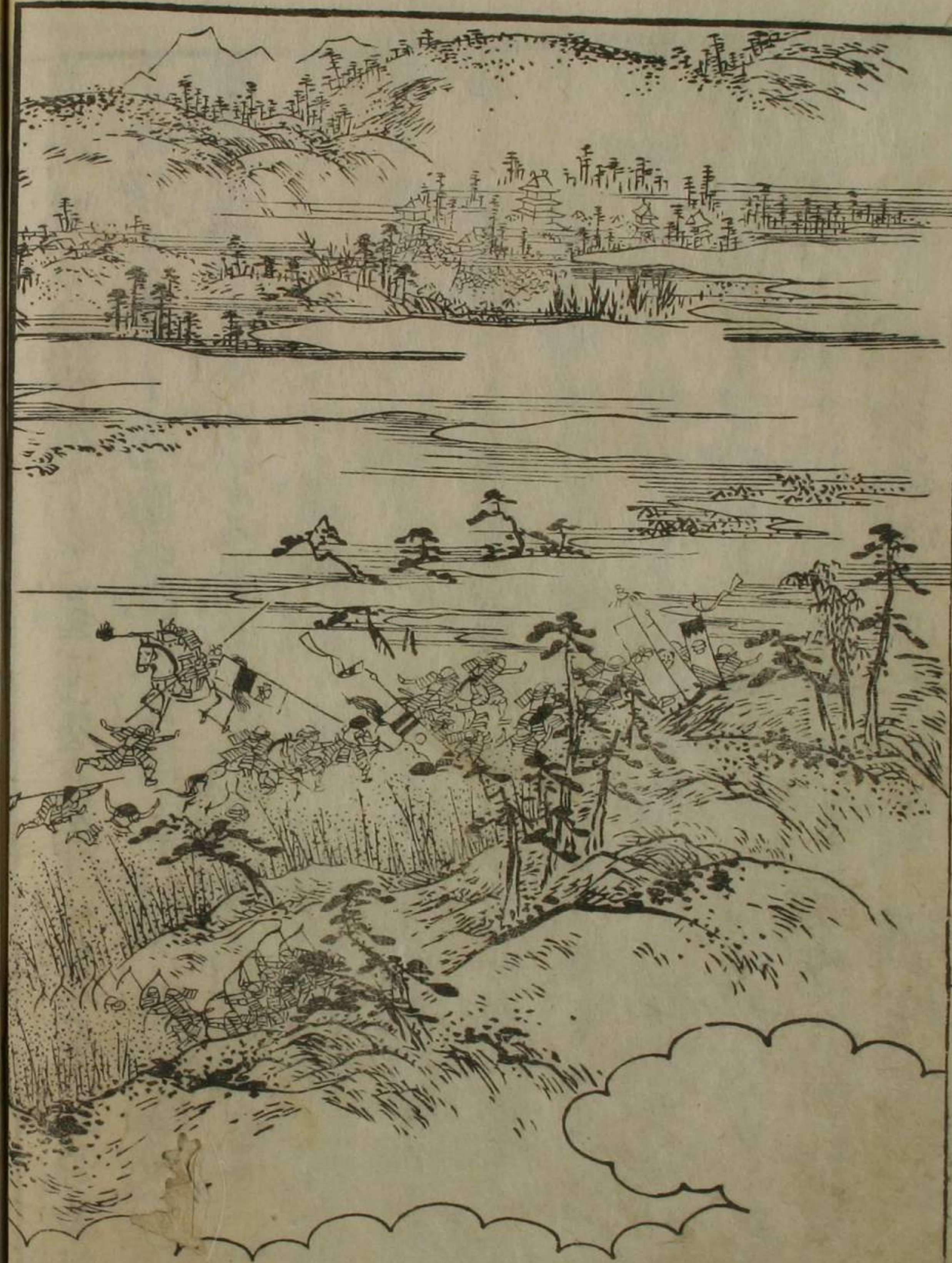
志保く度く軍功を獲て後法時彈正少輔長政と号する
いけ孫を清くするなり右の史記嚴事には山中送りたる信
長其面目を失ひ是より何となく信長卿と不和なりて終
反逆の企ありて合戦及び多うが只一戦は赤真通きて甲別
あり武田信玄を殺し志保くく安止りたり

反同計討山淵より

今川義元不目と上洛のより其少は頻々たる信長卿又く
軍の援ありたりふ柴田元就之間が安まりたるのより
後者即いさまぐ利害成て今川と戦て利あるよりを
とめやたる信長卿其心甚くして今川を戦人として其
用を志するに安まり海の地を山淵を馬久父今川と洛せ

其耐味方の難儀として蓋て後者即計策を定めて自
百余騎を率い海の地を圍めて攻めたる海を過り
此を構へ今川方の諸士も皆山淵より力を合せ二日
て出たりたる本下が軍兵たり負て引退き伏勢をせり
炮を雨のうちに放るがより安まり換炮より返りたる
根を抜て放るがより今川勢もゆるみ其息を限り退
りたる本下が後法時孫を清馬より大音揚てやたる
山淵の勢より今川より加勢の者より用を改め換
炮より玉とて矢の根をじて射たりと下知とせし今
換炮根より矢を射けりるが急休を改め山淵を
探へ今其安のより換炮と雨より撃く放る山淵の勢今

を
山
子
淵
謀
畧
及
間
隙



川の加勢をとは碓易とは鳴海の城へ入る叔も今日の合戦不
審きのて今川の加勢心と付るふ家前敵より城内討込一矢
も悉く根を除きさりた叔山則父子又信長と既前にて
我とと遠討ん計策と大に疑ひ教へる也と退散し此
中飛れを以て義元へ訴へる也も及者が謀略と今川のをと
以て山則父子を討せんと計す者なり

山則父子之命

叔も山則虎馬女と討しる戸部新左衛門右衛門と若
今川が腹心は遠州淡松の城を新田赤備中守となりていふも
実の死を歎き今度山則父子信長の軍兵を引退して我
をぬくさるも金く山則が及心ちるなりと訴へる也が執君の歎を

山則父子と赤備せんのを熱訴しる備中守とに驚き急
にいふ義元言上るさるも是より先鳴海の諸士より山則父子を
我の様子飛れがといふに後をまらくの時に叔山則父子と義元が城を拓く山
則父子其子細と怪しむ也といふに義元と討て疑ひをせんの
を恐る父子諸士は後方といふ急ぎさる既に義元の本城に
あり九郎治郎の玄園と拓く虎馬女唯一人執次の侍と誘ひて奥
深く入りさるにある妻戸の蔭より戸部新左衛門右衛門といふ
なりといふに虎馬女といふと組付る山則もいふに勇士と
といふ心得さると組合といふにいふに叔山則父子と義元と
る新田赤備中守とに意を励し山則虎馬女といふを以て也



山内文子

七五



山内文子
亡命

山内文子

七五

其二

